農政産業観光委員会　県内調査活動状況

１　調査日　　令和４年１０月２５日（火）

２　出席委員（９名）

委 員 長　　清水喜美男
副委員長　　臼井　友基
委　　員　　白壁　賢一　　志村　直毅　　向山　憲稔　　藤本　好彦
　　長澤　　健　　浅川　力三　　水岸富美男

欠席委員（０名）

委　　員　　なし

地元議員

午　　前　　佐野　弘仁

３　調査先及び調査内容

（１）【山梨大学 水素燃料電池ナノ材料研究センター】
　　やまなし水素・燃料電池バレー推進事業費

〇調査内容（主な質疑）

問）　先ほど説明のあった「やまなしＨＦＣクラスター」について、もう少し詳しく説明してほしい。

答）　個社単独では、大企業と繋がることが難しいことから、令和元年から燃料電池産業について県内で意欲のある企業により企業団を形成することとした。
　県と山梨大学が連携して、情報交換会や大手企業とのマッチングを行っている。

問）　これは山梨県内の企業の集まりということか。山梨県内の企業団ということであれば、何社くらいで、どういった企業が参加しているのか。

答）　全て県内企業であり、現在５５社が参加している。

問）　先ほど「やまなしスタック」の説明があり、現時点ではアシスト自転車などにも活用が広がっているとのことだが、それ以外に「やまなしスタック」はどういったところに広がっているのか、何か具体的な事例があれば教えてほしい。

答）　「やまなしスタック」については、まだ量産化に至っていない。
　一方で、今年度、「やまなしスタック」を活用した製品開発に対し助成する事業を実施

している。現在は募集をかけている状況だが、いろいろな観点からの相談を受けている。例えば、災害の観点から何か使えないかなど、具体的には言えないが、いくつか応募が上がってくる予定がある。

現在は２００ワットであるが、今後は、高出力化を見据えて製品化を支援していきたいと考えている。

問）　「やまなしスタック」は非常に優れた燃料電池だと思うが、全国的に見て、これと類似しているものがほかに出ているのか。出ているのであれば、それと比べて「やまなしスタック」が優位になっているのはどのようなところか。

答）　現在、国内では２００ワットクラスのものは存在しないが、海外には存在する。海外と比べると、性能は同等だと思っている。耐久性については、燃料電池動かし方によって変わってくる。日本国内に海外メーカーのスタックだけを買ってきた者がいるが、すぐに性能が出なくなるという問題を掴んでいるため、そのようなことがないようにしたいというのが現状である。

問）　今、開発しているＦＣアシスト自転車についてだが、今後、峡南地域では、電動自転車で地域を観光できるような話があるのだが、ＦＣアシスト自転車を購入する場合、どのくらいの価格となるのか。また、今は荷台に大きなタンクがあるのだが、将来的に小型化が可能なのか。さらに、どのくらいの距離を走ることができるのか。

答）　価格については、現在はスタックのみで１５０万円、それに上物の値段がプラスされるが、現時点では量産化できていないため、どうしても金額が高くなってしまう。上物と合わせると、原価で１５５万円から１６０万円かかる。また、航続距離については、１回の充電で１００キロメートル走ることができる。通常のアシスト自転車は５０キロメートル程度のため、２倍走ることができる。さらに、小型化についてだが、今は安全上の規制から、保護カバーも含めて大きくなってしまうが、デザイン性についても、今後、規制の部分とセットで検討していく必要があると思っている。国も現代に合わせた規制という同じ方向を向いていると思っているため、今後、量産化を図る上で、市場に出すために値段を下げることと同時に、売れるものをつくっていくための検討をしてきたい。

※説明、質疑の後、山梨大学 水素燃料電池ナノ材料研究センターの視察を行った。

（２）意見交換会

①出席者　県立農林大学校に在籍する学生の方々

②内容　　「若者が働き、活躍できる山梨県の農業について」

〇主な意見

委　員）　皆さんの中で、また友達など近い年代の人も含めて、農業に対してどのようなイメージを持っているのかをお聞きしたい。

自分のイメージ、また、今、自分が農林大学校に行っていると周りの人に言ったときに、どのようなイメージを持たれているのか、皆さんの率直な感想も含めて伺う。

出席者）　私が農業に対して持っているイメージは、１人で作業していても作物をつくることができるという点に魅力を感じている。私は人と関わるのが余り得意ではないため、黙々と作業をして、よいものをつくっていきたいと思っている。

出席者）　作業自体は大変だと思うのだが、やはり収穫できたときや自分で作った作物を食べたときの感動があるので、その点に魅力を感じている。周りの人に農業関係に進むという話をすると、「天候に左右されて大変」というような話をされる。

出席者）　私は、災害や気候変動、地球温暖化等の影響があり、数量を安定させて栽培することが難しいということもあるのだが、経営のやり方次第で、自分で収益を上げることができる点にやりがいを感じている。

出席者）　農業に対してのイメージだが、私は、実家が農家ということもあったため、昔から、母に、農業の手伝いを頼まれていた。その中で、生産物を見て、「自分でもこういった物をつくれるんだ」と感じ、子供を育てるということではないが、何かを育てる楽しさを知った。

私は、家が農家の友達もいるが、その友達の中には、農業に対して「大変」というイメージが付いており、家で農業の手伝いをそれほどしたことがないという人も多い。先ほど「天候に左右される」という話もあったが、やはり、休みが取れないのではないかという点を懸念している友達が周りに多くいる。

出席者）　私が農業について抱くイメージだが、私が幼いころから、両親が桃をつくっており、そういった農作業を近くで見て、手伝うということを重ねてきた。農業は歴史が長く、古くから、そして、これからも人の生活に影響を与えていく産業ではないかと考えており、非常に大事な産業と感じている。

同じ世代の人たちが農業に対してどのようなイメージを持っているかについては、正直、そのような会話をすることがないためわからないが、スーパーに並んでいる物や輸入品など、私たち若い世代も農産物に対しての関心や知ることに対する意欲

は、以前にも増して強くなっているのではないかと感じている。

出席者）　私が持っている農業に対するイメージは、やはり難しいというイメージが大きい。天候にも市場にも左右され、いきなり新品種が出てきたりもする。しかし、そのようなことをうまく乗り越えて、よいブドウをつくるというのが農業の醍醐味と思っている。

出席者）　私が持っている農業に対するイメージは、「農家」というイメージが強くある。農家は自営のため、自分一人で自由に回せる。私自身、自分で回すことが好きなタイプのため、そのようなことから就農を考えている。

家が桃農家なのだが、桃がお金に見えてきて、収穫が楽しい。また、実際に収穫して食べてもおいしく、趣味などで知り合った人が生産した果物を買ってくれるのだが、「おいしかった」という言葉を聞くと、来年はもっと頑張るという気持ちになるため、そういった点についても魅力を感じている。

周りの人に「就農する」という話をすると、大人の人からは「収入の安定がどうか」などで心配される。「祖父がやっており、安定してきているので大丈夫」としか言えないが、そういった点があると感じている。

委　員）　皆さんの多くが就農を希望していると思っているのだが、まずは就農を希望しているかどうかを聞きたい。

また、皆さんの立場で、山梨の農業がどうあるべきか、例えば、今はブドウや桃の生産量が全国一位であるが、もっといろいろな農作物にチャレンジしていくべきだ、今はスマート農業などが普及してきているが、そういったものをもっと進めるべきだなど、皆さんにとって「山梨の農業はもっとこうしていくべきだ」という点があれば教えてほしい。

出席者）　私は就農希望である。ほかに選択肢がないため就農希望というところである。

山梨県の農業がどうあるべきかについては、今ある桃やブドウを維持できるくらいでよいと感じている。

出席者）　私は就農希望である。

山梨県の農業については、以前、授業で長野県のブドウ生産量が多くなっており、２、３年後には越されてしまうのではないかと聞いた。その理由は、土地が広いという点もあるのだが、新規就農者への支援が手厚く、生産量は高齢者が多いのだが、新規就農者がふえることが大事だと感じているため、若者への支援を考えていただきたいと思っている。

出席者）　私は、将来的には就農して、農業で生計を立てていければと考えている。

山梨県の農業については、現在、気候変動の影響が大きくなっており、未来を考えると、山梨県で今と同じ農作物を、同じ手法で栽培できるとは言えないため、先を見越して気候変動に合わせた農作物の選択、また、新しい農作物、そしてブドウ

や桃以外の作物を育てることも考えるべきと感じている。また、気候変動のこともあり、これから安定した農業が難しくなるため、兼業や副業で農業を行う方も多くなるのではないかと感じている。そのため、スマート農業などを活用して、そういった方への支援があればと考えている。

出席者）　就農希望かどうかという点については、私は、すぐには就農せず、将来的には就農して、自分で稼げるようになっていきたいと感じている。

山梨県の農業がどうあるべきかについては、今の山梨県の農業は高齢者が多く、若者が少ない状況に陥っている。高齢者の方は、だんだんと農業を辞めていくため、耕作放棄地もふえてしまう。そのため、若者への支援が大切になってくると思うが、自分の周りの友達は「農業は大変」というイメージを持っている人が多く、どうしたらよいのか、その答えはわからない。

話は変わるが、私は、試験場の病害虫科で勉強をしていた。そこでは、気象データを活用して病害虫発生を予測するものがあり、ＩｏＴやスマート農業が進んでいると感じた。「農業は大変」ではなく、「農業はやりやすい」「農業は稼げる」ということを、自分たちはやっている身なので、多少はわかってきているが、全く触れていない人たちは分からないと思う。そのため、そういったことを広めていくことが大切ではないかと感じている。

出席者）　私は、ここを卒業して、すぐに就農という形ではなく、一旦企業へ就職してから、その後に家に入って就農したいと考えている。

これからの山梨の農業がどうあるべきかについては、人的な問題では、やはり後継者不足や高齢化、それに伴って耕作放棄地がふえているという点が、これまでも問題になってきた。

以前、県内の農地基盤整備の実態を見学する機会があったが、地域が一体となって、耕作放棄地がふえていたところを全てひとまとめの大きな農地にして、組織的な運営をしているという事例を見学した。農業をやったことがない人や、これから農業を始める人に対しては、農地を集約し、作業しやすい環境づくりを進めることが必要ではないかと感じている。また、そこで生産された農産物を販売するにあたり、どのように販売していくのか、どのようにプロモーションしていくのかということも大切ではないかと感じている。例えば、小学校や中学校の給食で使う材料として、山梨県産のものを積極的に使う形が取れれば、生産者の安定供給に繋がり、経営安定に繋がる要因の一つになるのではないかと感じている。

私たちの世代は、日々いろいろな情報を、自分で選ばずともいろいろと見る状況にあるため、そういったところで、農業という分野が無意識的にでも目に入る状況をつくれば、周知が広がるのではないかと感じている。

出席者）　私は、今すぐに就農をするつもりはなく、県内ワイナリーに就職する。

山梨の農業がどうあるべきかを考えたことはないが、気候変動に対応した品種開発や技術開発、また、輸入や輸出の推進などが進んでいくとよいと感じる。

出席者）　先ほど言ったとおり、私はすぐに就農する。祖父が年を取っていることもあり、すぐに家に入ってやりたいと考えている。

山梨の農業がどうあるべきかについては、今、ほとんどの農家が農協などに出荷していると思うが、小さい規模の農協では、全部の品種を扱っていないこともあり、扱っていない品種をひとまとめにしているため、いろいろな品種や品質のものが混ざってしまっており、余りよいとは言えないと思う。先ほど気候の話が出ていたが、経営者は、気候に合わせていろいろな品目をつくったほうがよいと思う。売り方については、西日本のほうでは、きれいにパッケージングしており、箱を開いたときに、ただ並んでいるだけではなく、例えば、カードなどいろいろと入っている。今、若者などが果物を買う場合、インスタ映えなどを意識して買う場合があるため、パッケージをきれいにすることも大切だと考えている。

委　員）　御両親が家の農業を継がせたくなかった理由について、御自身では、どのように考えているかをお聞きしたい。

出席者）　両親が農業を継がせたくない理由については、両親からは「サラリーマンになって欲しい」とよく言われる。それは、農業だと食べていけないのではないかということを心配されているからと思っている。私は、一度やってみて、うまくいかなければ、その後考えればよいかなと思っているため、就農したいと考えている。

委　員）　農業をされていない中で、どういったきっかけで農業に興味を持ったのかお聞きしたい。また、若い人への支援をしてほしいという意見があったが、具体的にどのような支援が考えられるかお聞きしたい。

出席者）　まず、農業に興味を持ったきっかけについては、高校３年生の初めくらいにコロナが流行り始めて「免疫が重要」と言われる中で、睡眠や生活習慣が大切となって、やはり体をつくる上で食が大切だと感じた。最初は、野菜専攻で農林大学校に進学しよう考えたが、「果樹王国と言われる山梨県にいるのであれば果樹を学んでみよう」と思ったのがきっかけである。

次に、若者への支援については、詳しいことは分からないのだが、果樹は実がなるまでに３、４年の時間がかかり、その後収益が出たとしても安定的な収益に繋げるのは難しいと感じるため、少し長い５、６年のスパンでの支援が必要ではないかと感じている。

委　員）　農業経営を真剣に考えているとのことだが、農林大学校を卒業した後、どのような農業経営を展開していきたいと考えているかお聞きしたい。

出席者）　農業経営をどのように考えているかについては、将来的には、山梨県の農業関連の企業で働いて、果樹の兼業農家として経営を行えればと考えている。

果樹は、植えてから成園化するまでに時間がかかるため、兼業して、２つの仕事で生計を立てたいと考えている。そのため、先ほど述べたとおり、兼業や副業の支

援があればよいと感じている。

委　員）　お母さまの実家が農業をされており、今後、就農を考え、山梨県の農業に貢献したいとのことだが、どのようにすれば山梨県の農業に貢献できると考えているのか。また、若い人に対する農業の支援をしてもらいたいと伺ったが、具体的にどのような支援をしてもらいたいと考えているかお聞きしたい。

出席者）　まず、山梨県の農業への貢献については、私としては、自身が農業に携わることで、山梨県の農業に貢献できていると感じている。いろいろな話を聞く中で、苗木の生産者が少なくなっていることを知り、苗木の生産などに関わることができれば、その面でも貢献できるのではないかと感じている。

次に、若い人に対する支援の方法については、新規就農者に農地を借りやすくする方法を教える、農林大学校で学ぶための修学支援の継続、初心者でも分かりやすいレベルに応じた技術支援などが考えられる。ただ、支援をする前に、支援される方に農業に興味を持ってもらわなければいけないと感じているため、中高生などには、農業遺産のことを徹底的に周知し、山梨県にはすばらしい資源があることを伝えながら興味を持てるよう紹介し、実際に農業を体験してもらい、自然と触れ合うことで、農業の楽しさを知ってもらうことが大前提として大切だと感じている。

委　員）　まずは農業法人へ就職したいとのことだが、農林大学校へ進学された理由が「専門知識を身につけたい」ということであり、実際に農林大学校に在籍して学んでいる中で、具体的にどのような専門知識を習得し、身につけた知識をどのように生かしたいのかをお聞きしたい。

出席者）　私は、農林大学校に入学した当初は、桃などの果樹について勉強していた。成人になり、お酒、特にワインを飲む機会がふえたことで、ワインと山梨県のワイン産業に興味を持ち、それをきっかけに専攻科に進学した。専攻科に進学してからは、主に醸造用ブドウについて勉強し、果樹試験場でも醸造ブドウの品種開発の部署で研修をさせていただいており、そういったところで基礎的な栽培技術、品種の知識、また、これからの山梨県の気候に合った栽培方法や品種開発の知識を、今、習得しているところである。

就職先については、専攻科での異業種派遣研修において、１年生のときには、明野にある中央葡萄酒のグレイスワインへ研修に行かせていただき、ことし、２年生では、サントリーのジャパンプレミアムヴィンヤードに研修に行かせていただき、そちらに就職していこうと考えている。

委　員）　実家がブドウ農家ということで、県内のワイナリーに就職したいという明確な理由を持っていると感じた。先ほど「輸出を進めていくべき」という意見を伺ったが、山梨県も、知事を筆頭に輸出を強く推進しているが、なぜ輸出を進めるべきと考えたのかをお聞きしたい。

出席者）　私が輸出を推進する理由については、将来的に国内の市場が縮小すると言われており、これから成長する国に対してブドウで収入を確保したほうがよいという考えのもと、輸出を推進している。

委　員）　実家が農家ということで、幼いころから農業現場のことを知っている中で、おじいさまが年配になられてきたため、すぐにでも現場でおじいさまの手伝いをしたいとのことだが、その気持ちがあっても、農業はできない部分がある中で、誰もが、その気持ちを持っていれば、農業ができるような、そういったアイデアがあれば教えてほしい。

出席者）　気持ちがあれば農業ができるためのアイデアについては、まず、農業をやるにおいては、時間はもちろん、お金、土地、機械などが必要になるため、そういったことへの支援が必要だと感じる。今は土地を借りることはできるが、道具などは、補助金よりも、安くリースできるような支援のほうがよいと感じている。大きな農家や企業なども含め、補助金を一律に支給するよりも、全く何もない人に対してリースなどの支援をしたほうが経費も削減でき、普及につながるのではないかと感じている。また、指導をする人が必要になるため、そういった人とのコミュニケーションを確保することに対する取り組みが必要ではないかと感じる。講習会だけでは、質問し難い環境があるため、そういった機会があればよいと感じる。

委　員）　本日は大変有意義な意見交換会ができ、本当に皆さんすばらしいと感じた。

私の実家も農家を営んでおり、桃、ブドウ、柿などを栽培している。今、振り返ってみると、私自身も農業を３０年ほどやっている。昔、「落葉果樹を５０年やっても、５０回しかつくれない」と先輩方によく言われた。この時期から準備が始まって、花が咲いて、結実して、収穫という１年のサイクルの中で、もちろん気候変動という事象もあるが、栽培管理で失敗すると、それで品質が低下し、収量に影響が出てしまう。そういったことを、私も何度も経験した。でも、まだ３０回。本当に農業は奥が深い。それを、この農林大学校で学んで、これから農業または農業に関連した仕事についていきたいという皆さんの思いが、本当に尊いと思った。

農業は生命維持産業で、これからは人口も減って、市場規模が小さくなるかもしれない。しかし、私たちは霞を食って生きていくわけにはいかない。ただ、果樹は、お米などと違い主要な作物ではなく、果樹自体で主食となるものではない。そういったところで、売り方やプロモーションの工夫など、皆さんの若いアイデアで多くの人に伝えていってほしいと感じている。

すぐに就農するとい方もいたが、それが一番大変だと思う。農業をやりながら、地域の方や県の方など、いろいろな方と関わりを持ってほしい。家に入ってしまうと、どうしても家の経営のことで頭がいっぱいになってしまうが、若いうちは、いろいろなことにトライしていただきたい。

皆さん、それぞれが山梨県の農業を支えていただける人材だと思っている。私からは、質問というよりは、皆さんの将来に大きな期待をして、そして山梨県の農業を共に支えていけたらと思っているため、ぜひ頑張っていただきたいとうエールを

送りたいと思う。

委　員）　きょうは７人の学生の方に、カリキュラムの間を縫って参加していただいた。皆さんの意見を聞いて、自分の意見をしっかり言うという、一番大事なことができていると感じた。先ほども話が出ていたが、私たち生き物は、食べなければ生きていくことができない。食べるために農業をどうしていくかが大切になるため、生きることイコール農業とも言える。そういった意味では、山梨県あるいは日本の農業をどうしていくのかということについては、皆さんのこれからにかかっていると思う。我々議会の立場でもいろいろな形での支援を考えていきたいと思っている。これからも、いろいろな機会を設けながら、必要であれば意見交換の場を設けることもできると思うので、何かあれば、校長先生を通じて言っていただければと思う。

※意見交換会の様子